

第58回企画展

北の縄文文化回廊展

会期 平成19年7月14日(土)～8月26日(日) 会場 特別展示室

“しょっぱい川”の異名を持つ津軽海峡。本州と北海道を隔てる障壁であると同時に、人々が往来する交流の道でもありました。交流はるか数千年の昔、縄文時代にさかのぼります。海峡両岸にあたる北海道道南の渡島半島から青森・秋田・岩手の東北地方北部にかけては、活発な交流により縄文時代を通じ共通する文化圏が形づくられ、独自の発展をとげていたことが明らかになっています。本展覧会では、4道県から各地を代表する資料を一堂に集め、この地に花開いた“北の縄文文化”をご紹介します。

■海をこえた広がり

縄文人は丸木船を操り海産資源の調達、物資の交易を行うために荒海に乗り出していました。海峡は人々の行き来を阻んだのではなく、航海技術の発達や人、情報の伝達をうながし、海を中心とした繁栄をもたらしたのです。その証拠とも言えるのが、道南から北東北にかけて分布する遺物の数々です。

縄文時代後期には、器面に弓と矢、人物、獲物、木、ワナ（おとし穴）などが描かれた「狩猟文土器」が作られました。具象的な文様が少ない縄文土器の中では例外的な存在です。北東北を中心に一部渡島半島からも出土しているこの土器は、豊猟を願う儀礼に使われたのではないかと考えられています。



青龍刀形骨器（重要文化財）
八雲町コタン温泉遺跡
八雲町教育委員会蔵・写真提供



狩猟文土器（青森県重宝）
八戸市葦窪遺跡 青森県教育委員会蔵
※複製品を展示します。

少し時代を遡った中期では、「青龍刀形石器」がこの地域の代表的な遺物です。古代中国の武器である青龍刀と同様、幅広の湾曲した形から命名されました。内側につけられた刃は鈍く、素材の石も軟質であるため、実用的な武器ではなく祭祀に関わるものではないかと考えられています。道南から北東北の太平洋岸にかけては、鯨の肋骨などを素材とした青龍刀形鯨骨製品も作られました。



スタンプ形土製品
千歳市キウス4遺跡
北海道埋蔵文化財センター蔵・写真提供

これらの他、切断壺形土器、スタンプ形土製品、鐸形土製品、キノコ形土製品、単孔土器といったように、北東北と道南を中心に分布する資料は数多く確認されています。実用品よりも祭祀や儀礼に関わるとされる遺物が多く、精神的なつながり、共通性を意味しているのでしょう。

■土器群像の世界

縄文時代と言えば縄文土器。様々に飾られた土器には縄文人のエネルギーや世界観が表現されているとも言われます。一方、土器の文様や形は一見して自由奔放に見えますが、時代や地域によって一定の規範に従い作られているため、年代や地域色を表す資料としても貴重な存在です。

北緯40°以北から石狩低地帯にかけた地域で縄文時代前期後半から中期前半にかけて勢力を誇ったのが、まっすぐな筒形が特徴の円筒土器。ドングリやトチなどの堅果類を大量に消費するようになり、アク抜きなどの道具として発達したと考えられています。見所は工夫が凝らされた縄目文様です。縄文時代の中でも最も縄目を駆使した装飾の緻密さには驚かされるほど。

縄文時代後期から晩期にかけては、日常使う器と非日常的な「ハレの器」が明確に分離し、後者では浅鉢、壺形、台付鉢、注口土器、香炉形土器といった形のバリエーションが発達します。精巧に描かれた文様、ベンガラや水銀朱、黒漆の対比による鮮やかな色彩感、光沢を発する器面の研磨技術。この時代、土器作りの専門職人がいたのでは、とも言われています。野田生1遺跡の赤彩注口土器（表紙写真）をはじめ、造形のおもしろさをぜひ堪能して下さい。

■墓とマツリ

人の生死に対する思想や信仰、それが表現された葬送方式は、地域の伝統を強く伝える部分です。この地域では石を使った巨



小牧野遺跡祭壇状特殊組石
（青森市 国史跡）
青森市教育委員会写真提供

大なモニュメント、ストーンサークルの発達が特色として挙げられます。古くから有名な鹿角市大湯環状列石をはじめ、近年の調査によりこの地には縄文時代後期になって多数のストーンサークルが作られたことが明らかになってきました。青森市小牧野遺跡、北秋田市伊勢堂岱遺跡、北海道森町鷺の木遺跡など、いずれも周辺の村々が協同で営んだ葬祭場だと考えられています。

同じ時代には、石棺に一度埋葬した後しばらくしてから掘り出し、大形の甕形土器に再埋葬した再葬甕棺墓と呼ばれるタイプの墓が青森県域を中心に発達しました。



甕棺に使われた土器
二戸市下村遺跡 岩手県蔵

■人がたに込めた思い

土偶の製作は縄文時代中期以降に盛んになり、時代により特色ある土偶が生まれてきました。円筒土器に伴う板状土偶、十字形土偶。後期になるとしゃがんだ姿勢の土偶や首が前に突き出た土偶。そして有名な晩期の遮光器土偶は宇宙人にも例えられています。

また、東北地方と比較すると少ないものの、北海道でも特徴的な土偶が作られ続けました。その代表格は函館市著保内野遺跡の大形中空土偶。全長40cmを越える完形品で、このたび縄文時代の遺物としては全国3例目の国宝に指定されました。



男性形土偶（千歳市指定）
千歳市ウサクマイ遺跡
千歳市教育委員会蔵・写真提供

■海上の道と交流

産地が限定される資料の分布を調べることで、縄文時代の交流、交易の様子をうかがい知ることができます。新潟県糸魚川市が国内唯一の産地とされるヒスイ。秋田県沿岸の油田地帯から運ばれている接着剤として使われたアスファルト。長野県霧ヶ峰や北海道大雪山系で採掘された石器素材の黒曜石。更に伊豆諸島や南西諸島からはるばるもたらされた、オオツタノハやイモガイといった南海産貝類の装飾品など。想像以上の行動半径には驚かされます。遠隔地との交流は、人と情報の往来を促し、そして“回廊”が形成されていったのでしょうか。



イモガイ製腕輪（重要文化財）
伊達市有珠モシリ遺跡 伊達市教委蔵
※複製品を展示します。

■縄文から現代、未来へ

三内丸山遺跡や内浦湾沿岸の縄文遺跡群をはじめとして、近年は地域のルーツを縄文遺跡に求め、街づくりや交流、情報発信

の拠点にしていこうという気運が高まっています。4道県ではこうした活動を支援する目的で、縄文遺跡を軸とした地域間の交流と連携を図る「北の縄文文化回廊づくり」の取り組みを進めてきました。古くから伝えられてきた貴重な遺産を、地域の宝として未来へ引き継ぐ姿勢が、現代の我々に求められています。本展覧会では縄文文化の価値を再発見するきっかけとしていただければ幸いです。（専門学芸員 高木 晃）

【北の縄文文化回廊展関連講座】

いずれも無料

- 7月22日(日) 13:30～15:00 講堂
「円形祭祀場～北の縄文人の信仰心～」
佐々木勝（当館副館長）
 - 8月12日(日)13:30～15:00 教室
「土器が語る縄文人の交流」
高木晃（当館学芸員）
 - 8月26日(日)13:30～15:00 講堂
「縄文文化と津軽海峡」
福田友之氏（青森県立郷土館副館長）
- 【展示解説会】
- ① 7月15日(日) ② 8月19日(日)
13:30～15:00（入館料必要）
下記埋蔵文化財展もあわせて解説いたします。

同時開催

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター
30周年記念埋蔵文化財展
『イーハトーブ発掘物語』
1977年に(財)岩手県埋蔵文化財センターが発足して以来、30年間にわたり960件428万㎡の発掘調査を実施し、大きな成果を上げてきました。今回はこれまでの調査成果の集大成として、発掘が語る岩手県の歴史をご紹介します。土の中に眠っていた“歴史の生き証人”の数々をどうぞご覧下さい。

【記念講演会】

- 7月29日(日)13:30～15:00 講堂（無料）
「いわて発掘発見史」
相原康二氏（埋蔵文化財センター所長）